

『怒りのぶどう』におけるトム・ジョードの成長について：ケイシーからトムへ

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-06-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 重松, 宗育 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00008656

『怒りのぶどう』における トム・ジョードの成長について

— ケイシーからトムへ —

重 松 宗 育

『怒りのぶどう』のもつ重量感を思想的な面から支えているのは、ジム・ケイシーである。実際、ケイシーがひたすら真理を求めて思索を重ねてゆく姿は、正に荘重とも言ふべきほど印象深く描かれている。この意味で、この作品に接する場合、「ケイシーの内的発展」¹に焦点をあてて読み進む方法も当然考えられる。それと同時に、ケイシーがジョード一家の人々との交流を通して、それぞれに影響を与え、感化してゆく過程も興味深いものがある。

こうした側面を重視した F. I. カーペンターの評言は至言である。

But more important is Steinbeck's creation of Jim Casy, "the preacher," to interpret and to embody the philosophy of the novel. And consummate is the skill with which Jim Casy's philosophy has been integrated with the action of the story, until it motivates and gives significance to the lives of Tom Joad, and Ma, and Rose of Sharon. It is not too much to say that Jim Casy's ideas determine and direct the Joads's actions.²

中でもケイシーがトムに与えた影響は見のがすことが出来ない。この小説はいわば「大なる魂」の思想の伝達をめぐる小説でもあるのだ。小説の始まる以前にケイシーが精神遍歴の末得た「大なる魂」の思想は、ストーリーの展開と共に、移住労働者たちの窮状を救うためのストライキの論拠となり、また数々の体験を通じてトムがこの思想を体得して新たな担い手に成長し、次の物語の展開を暗示するところでこの小説は終わっている。いわば、前走者ケイシーが「大なる魂」の思想というバトンを、次の走者トムへと手渡すためのリレーゾーンにおいて、この小説はストーリーを展開しているのだ。

こうしてみると、トムを中心にして、彼がケイシーの語る思想に如何に接し様々な出来事を通して、またおっかあの慰めと励ましを受けながら、如何にそれを自己のものとして体得してゆくか、その内面的成長の過程を明らかにする必要があると思われる。

本論の目差すところは、正にそこにある。

(1)

『怒りのぶどう』のジョード一家の物語はトムがハイウェイでヒッチハイクをするところから始まる。トム・ジョードは、年令三十才ほどの青年で、マキヤレスターの刑務所から我が家へ戻る途中である。トムは、かつて酔払って喧嘩をし、人一人殺して七年の刑を受けたが、四年の服役で仮釈放となったところなのだ。

ヒッチハイクのトラックから降りて家路を急ぐトムは、その道すがらぼったりとジム・ケイシーに出会った。そしてなつかしさの余り、二人は、時のたつのも忘れて互いの身の上を語りあった。かつて牧師であったケイシーは、すでにその職をやめて、一求道者として放浪生活を送っていたのであった。

ケイシーは、牧師職をやめるに至った内面的な事情を物語った。だが、トムは全く無関心であった。ケイシーは、すぐ目の前にある福音をありのままに受け入れず、外側からあれこれ「つついたり、こねくりまわしたり」して分析し批判した挙句、その本質を見失ってしまい、人々をどこへ導いたらいいのか悩みぬいている人間である。それに対して、トムは、

“Lead 'em around and around,” said Joad. “Sling 'em in the irrigation ditch. Tell 'em they'll burn in hell if they don't think like you. What the hell you want to lead 'em someplace for? Jus' lead 'em.” (IV, 29)

と、まぜっかえすだけなのだ。ケイシーは、人間存在の二重性から目をそらすことが出来ず、人間の真実を求めて苦悩している。そして、聖なる教えを説く一方で、情欲に負け、信者の娘を草むらへ連れ出していた、その偽善性に耐えかねて、みずから牧師職を捨てた人間である。だがこうしたケイシーの告白もトムには無縁の世界である。

“I never let nothin' get by when I could catch it. An' I never

had no idears about it except I was goddamn glad when I got one.” (30)

トムに関心は、いかにケイシーの話題をそらすかにあるのだ。

トムには、時間的には、切り離された現在、空間的には、切り離されたここ、それだけなのだ。存在の時間的、空間的関連性の自覚、つまり万物の相依相関の関係の自覚は、トムには存在しない。個というものを、文明史的、生態学的に、全体との関連のうちにとらえる視点が完全に欠落しているのである。従って、トムにはいわば「隣人」の存在は不必要なのだ。このことは、先にヒッチハイクをした時、運転手に向かって言った言葉にもあらわれている。

“I don't mean nothin' neither,” said Joad. “I'm Just tryin' to get along without shovin' nobody around.” (II, 13-4)

この時のトムには、他人から切り離された自分しか見えない。互いに全く無関係ではありえない人間という存在のあり方への認識が欠落しているのだ。これはいわば「孤絶した個人」主義である。

このように、ケイシーの精神遍歴の告白には全く無関心であったトムも、次第にケイシーの熱気に心をひかれ始めた。そして、ケイシーが、人間のやることには罪も徳もない、「ただ人間どものやらかすことがあるだけだ。みんな、もとを正しゃ同じものなんだ」³と叫んだ時、トムは、その言葉の真意は把握できないながらも、ケイシーのその思索し推論する姿に人間的感動を覚えたのだ。

Joad was grinning at him, but Joad's eyes were sharp and interested, too. “You give her a goin'-over,” he said. “You figured her out.” (IV. 32)

更にケイシーは推論を続けていった。

“... 'maybe it's all men an' all women we love; maybe that's the Holy Sperit—the human sperit—the whole shebang. Maybe all men got one big soul ever'body's a part of.'...”

(32-3)

「人間全体が一つの大きな魂をもっていて、一人一人はその魂の一部なのかも知れねえ」——ケイシーがこの結論に到達した時には、トムは「まるで説教師

の目にあらわれた赤裸々な正直さを正視出来ないかのように⁴視線をそらし、黙って地面に目を落した。そうするしかトムには術がなかったのだ。ところでケイシーのこの言葉は極めて重要である。個というものを、時間的にも空間的にも全体との関連でとらえ、文明的、生態学的な視点から見てゆこうとするこのエマソン流の超絶主義（汎神論）思想がこの小説の中核をなすからだ。そしてトム・ジョードが、この言葉の意味を、様々な体験を通して次第に理解し覚醒してゆく過程が、この小説の一つのテーマでもあるからだ。

次いで、二人の話題は、トムの四年間にわたるマッキヤレスターの刑務所生活に移る。

“I’d do what I done—again,” said Joad. “I killed a guy in a fight. We was drunk at a dance. He got a knife in me, an’ I killed him with a shovel that was layin’ there. Knocked his head plumb to squash.”

Casy’s eyebrows resumed their normal level. “You ain’t ashamed of nothin’ then?”

“No,” said Joad, “I ain’t. I got seven years, account of he had a knife in me. Got out in four—parole.” (IV, 35)

ケイシーの「何も恥じることはねえんだね？」という問いに、トムははっきりと「うん、何もねえ」と答えているのである。

この話題は、廃屋化した我が家にたどりついた時にも、放浪生活中のムーリーが新たに加わって、再び繰り返されている。トムとしては、何も恥じることはなかったが、どうしてもぬぐい去れない疑問を抱いていたのだ。それは、刑務所の無意味さに対する疑問であった。トムはこう言っている。

“The thing that give me the mos’ trouble was, it didn’ make no sense. You don’t look for no sense when lightnin’ kills a cow, or it comes up a flood. That’s jus’ the way things is. But when a bunch of men take an’ lock you up four years, it ought to have some meaning. Men is supposed to think things out. Here they put me in, an’ keep me an’ feed me four years. That ought to either make me so I won’t do her again or else punish me so I’ll be afraid to do her again”—he paused—“but if Herb or anybody else come for me, I’d do her again. Do her before I could figure her out. Specially if I was drunk. That sort of senselessness kind a worries a man.” (VI, 74)

トムは、自分の犯した殺人を、「稲妻で牛が死んだ」とか、「洪水が起こった」とかいう出来事と同様に「全く自然なこと」だと感じているのである。だから、別に罪悪感もなく、「心に恥じること」もないというのだ。実際、酔っ払っている時に、相手がナイフをもって飛びかかってくれば、何も「考えねえうちに」自己防衛し、相手に反撃したとしても、全く自然な成行だとトムは思うのである。それは自然現象と全く同じではないか。それなら、何故それが罪と呼ばれるか。何故、刑を受けるのか。そして、自分のように、別に改心することも無い人間に刑務所暮らしをさせて、一体何の意味があるのか、というのが、トムの素朴な疑問だったのである。正にここに、生物的、原始的本能を中心にした、トムの反知性的傾向が躍如としているのだ。また、トムは、ジョン伯父の家へ向かう途中、興味深いことを口にしてている。

"I could shut my eyes an' walk right there. On'y way I can go wrong is think about her. Jus' forget about her, an' I'll go right there."
(VIII, 90)

トムの知識は身体を通して「体得」したものである。身体で覚えたものを頭脳に訴えるのは邪道なのだ。道のことを「考える」と道に迷う。忘れてしまえば身体が自然に運んでくれる。これがトムの反知性主義なのだ。

こうして、トムが自分の体験を語っている間にも、ケイシーは、深い思索へと沈潜していった。そして、突然、「もし人間がちょっとでも霊をつかめたとすりゃ、おれがそいつを取っつかめえたぞ！」⁵と叫んだ。このケイシーの叫びは、「大なる魂」の思想の内的体験であり、次第に弱者連帯へと発展してゆく、その論理的基盤となる体験であったのだ。ただ、トムは、ケイシーの言葉を「まるで何かせんさくしてはならぬ個人的な秘事でもあるかのように」⁶ことさらに無視していた。

しかしながら、このケイシーとの再会は、トムが、その後継者として次第に成長してゆく契機となった。つまり、思想的にはケイシーの「大なる魂」の思想を受け継ぎ、実践的には弱者の連帯への行動を受け継いでゆく人物に、トムは成長してゆくのである。

ただし、ケイシーは、トムの「原始的本能主義」、「孤絶した個人」主義の蔭にある「強情」で善良な性格を高く評価していた。

"You wasn't mean, but you was tough. Hung onto that little girl's pigtail like a bulldog. We baptize' you both in the name

of the Holy Ghos', and still you hung on. Ol' Tom says, 'Hol' 'im under water.' So I shove your head down till you start to bubblin' before you'd let go a that pigtail. You wasn't mean, but you was tough. Sometimes a tough kid grows up with a big jolt of the sperit in him." (VI, 75)

ケイシーは、トムが後に自分の後継者となる人物であることを予見していたのかも知れない。実際、トムが冷酷な利己主義者ではなく、心根のやさしい人間であることは、道端で見つけた亀を、小さい弟をよろこばせようとみやげに持ってゆくことから知られる。また、このあとケイシーと連れ立って家へ戻った時に、母親が必ず鍵をかける習慣だったドアがあいていることを知って、母が死んだものと思ひ、思わず涙ぐむところからも分かる。

こうして我々は、「孤絶した個人」主義を超えて、より大なる連帯の世界へと自己を拡大してゆく後の姿を、現在のトムの中に二重写しに見るような気がするのである。

(2)

廃屋となった我が家にミューリー・グレイヴスがやってきて、一家はジョン伯父のところで西へ旅立つ準備中だと知らされた。そして翌朝トムは、何年かぶりにおっかあをはじめ、家族の者たちと再会することが出来たのである。

ジョード一家の人々にとって、おっかあは、いわば「女神」であり、大黒柱であった。そして、トムをかばい、励まし続けた彼女の存在は、トムの内的発展にとって決して無視できないので、ここでいさかかふれておくことにする。愛息トムとの感動的な再会的一方、おっかあは大きな試練に直面していた。自分たちの土地を奪われ、家をつぶされ、路頭に放り出されて何もかも売り払わざるを得なくなった運命に、おっかあの表情も厳しさを増していたのだ。

"Tommy, don't you go fightin' 'em alone. They'll hunt you down like a coyote. Tommy, I got to thinkin' an' dreamin' an' wonderin'. They say there's a hun'erd thousand of us shoved out. If we was all mad the same way, Tommy—they wouldn't hunt nobody down—"

(VIII, 104)

自分たちのように、土地を追われて西へと向かう人々が十万人もいるというのが本当なら、みんなで力を合わせて、トラクターで追い出しに来る連中に向か

って、抵抗し怒りを示したらいいのではないか。おっかあは、のちにケイシーが深い洞察の中から生み出してゆくものを、いとも簡単に言い当てているのである。これは、おっかあ自身もまた、単に家族を守ることから、より大なる社会的連帯へと意識を高めてゆく、その萌芽と言ってよいだろう。

その日のジョード一家の朝食でのお祈りは、おっかあとトムの心に少なからぬ感動を与えた。それは、ケイシーが自ら真実を求めてイエスのように荒野へ入り、丘と自分が一体であることを実感したその体験談であり、また、一人一人の人間が離れ離れにならず全体へとつながって調和している時、それは神聖なことだ、という主張であった。ところが、この風変わりなお祈りが、おっかああの精神を大きく揺すぶったのである。

Ma watched the preacher as he ate, and her eyes were questioning, probing and understanding. She watched him as though he were suddenly a spirit, not human any more, a voice out of the ground. (VIII, 111)

おっかあは、ケイシーのお祈りの仕方が通常のものとは違っていたことを奇異に感じた。だがその一見、ただのおしゃべりに見えたものの中に、何か真実なものを直感したのである。トムもまた、いささかの不可解さを感じつつも、ケイシーの真摯な態度に心を打たれているのだ。

“He’s a funny fella,” said Tom. “Talks funny all the time. Seems like he’s talkin’ to hisself, though. He ain’t tryin’ to put nothin’ over.” (X, 127)

おっかあは感動の声をあげた。

“Watch the look in his eye,” said Ma. “He looks baptized. Got that look they call lookin’ through. He sure looks baptized. An’ a-walkin’ with his head down, a-starin’ at nothin’ on the groun’. There is a man that’s baptized.” (127)

人間の二重性に対する葛藤を超克し、ひたすら人間の真実を求めて思索を続けるケイシーの姿に、おっかあは、「浄められた人間」を見たのである。

そして、ジョード一家はケイシーの同行の申し出をめぐってトラックの傍で家族会議を開いた。問題は、トラックにケイシーを乗せる余裕がないことだ。

それで皆がためらっているのにしびれを切らしたおっかあが、敢然と言った。

“It ain’t kin we? It’s will we?” she said firmly. “As far as ‘kin,’ we can’t do nothin’, not go to California or nothin’; but as far as ‘will,’ why, we’ll do what we will.”
(X, 139)

このおっかあの言葉でケイシーの同行は認められた。そして、ケイシーも加わって、一家は出発の準備を急ぎ、日の出とともに、西へ向かって旅立ったのである。

トラックを運転するのはアルの役目だった。車の責任を負い、エンジンの調子がひどく気になっているアルは、「あんな説教師なんか連れてきちゃいけないかったんだろうよ」と言った。だがおっかあはアルを諷めた。

“You’ll be glad a that preacher ’fore we’re through,” said Ma.
“That preacher’ll help us.”
(XIII, 168)

おっかあは、ケイシーの人格が力であることを知っていた。そしてそれによって、自分を含む家族の者たちが、より大なる自己へと成長してゆくことを、自信をもって予言しているのだ。

(3)

トムとケイシーは、ペイドン近くで立寄ったガソリンスタンドの男と話をする。男は、ケイシーの話にはうわの空で、子供や家財道具をつみ込んでハイウェイを西へと急ぐ人々の群を見ながら、「一体この国がどうなっていくのか、わしには分からねえよ」と、ただ気安めのように繰り返すばかりである。そこでトムは、腹立たしげに言葉をはさんだ。

“Well, you ain’t never gonna know. Casy tries to tell ya an’ you jest ast the same thing over. I seen fellas like you before. You ain’t askin’ nothin’; you’re jus’ singin’ a kinda song. ‘What we comin’ to?’ You don’ wanta know. Country’s movin’, aroun’ goin’ places. They’s folks dyin’ all aroun’. Maybe you’ll die pretty soon, but you won’t know nothin’. I seen too many fellas like you. You don’t want to know nothin’. Just sing yourself to sleep with a song—‘What we comin’ to?’”
(XIII, 174)

「おめえさんは本当は知りたいとは思ってねえんだ」というトムという言葉は、彼がケイシーとの交わりのうちに、次第にその影響を受け、自分たちのおかれた窮状の知的把握に関心を持ち始めた証拠だと言ってよいだろう。

ベサニーの町を通り過ぎたところに、一台の観光用自動車が止まっていた。トムはその隣りをその日のキャンプ地を選び、その隣人に許可を乞うた。だが自分の所有地ではないと言訳した男に向かって、トムは言った。

“Anywaws you’re here an’ we ain’t. You got a right to say if you wan’ neighbors or not.”
(XIII, 183)

こうして、トムがよき隣人であろうとしたことは、「孤絶した個人」主義から大なる連帯への確実な一歩であることに間違いない。

男は、アイヴィー・ウィルソンと言い、病気の妻セアリーとカリフォルニアへ向かう途中、車の故障で立往生していたのだった。だが、こうして新しい仲間と知り合いになったのも束の間、じいさまが卒中をおこし、その夕方セアリーのテントで息を引きとった。そして、ウィルソン夫妻の好意的な尽力もあって、じいさまは土に還っていったのだ。

こうしたきっかけで、ジョード家とウィルソン夫妻との善意の交流が始まり、ニードルズでの別れまで続くことになる。そして、何とかウィルソン夫妻に恩返しをしたいと考えたアルとトムは、ウィルソンの観光用車の修繕を申し出た。そのうちに、二台の車へ荷物と人間を分散させれば、車に無理な負担をかけないですむことになり、双方互いに好都合だと気がついたトムは、それを説明する。ウィルソンは、飛び上がって喜んだものの病身の妻と所持金のことを思い、重荷になることを恐れ躊躇する。だが、同様にためらっているセアリーに向かって、おっかあは、明解に宣言したのだ。

“We gonna see you get through. You said yourself, you can’t let help go unwanted.”
(XIII, 203)

作者スタインベックは、前章の中間章で、このジョード家とウィルソン夫妻の邂逅と相互扶助を、次のように示唆している。

And here’s a story you can hardly believe, but it’s true, and it’s funny and it’s beautiful...But how can such courage be, and such faith in their own species? Very few things would teach such faith.
(XII, 165-6)

この邂逅は、おっかあにとっても、トムにとっても、一つの象徴的な出来事であった。苦境におかれた者同志が、家族のわくを超えて、より大きな連帯の輪の中で相互に助けあう、その実践の場であったのだ。

サンタ・ローザを過ぎて、観光用車が再び故障した。そこで、トムは、自分とケイシーが残って修繕し、それ以外の者はその間に先へ進むことを提案した。これに対して、おっかあは、猛然と「反逆」した。その結果、家族を離れ離れにさせまいとする彼女の主張が勝って、車の修理がすむまで、一行は近くでキャンプして待つことになる。だが、こうしたおっかあの家族に対する執念にも反して、現実のジョード一家は、次々に崩れてゆき、彼女としても新たな、より高度な社会的連帯を迫られてゆくことになるのだ。

さて、車の修繕をしながら、トムとケイシーの交した会話は再び両者の対照的な資質を浮きぼりにして、極めて興味深いものがある。

“Tom, they's hunderds a families like us all a-goin' west. I watched. There ain't none of 'em goin' east—hunderds of 'em. Did you notice that?”

“Yeah, I noticed.”

“Why—it's like—it's like they was runnin' away from soldiers. It's like a whole country is movin'.”

“Yeah,” Tom said. “They is a whole country movin'. We're movin' too.”

“Well—s'pose all these here folks an' ever'body—s'pose they can't get no jobs out there?”

“Goddamn it!” Tom cried. “How'd I know? I'm jus' puttin' one foot in front a the other. (XVI, 230)

ケイシーの目下の急務は「国全体を変えてしまうような出来事」の正体を見極めることだ。まず社会という全体を把握し、その中での自己の位置を見極めるのだ。社会の現実を直視し、そこから自分のなすべき道を見つけ出そうというのである。これに対してトムは、社会という全体を見る前に、まず目の前を見る。今、ここを見るのだ。そして、その場その場で、自分のなすべきことを確実に果たしていこうと考えているのだ。この先がどうなろうと、「ただ一歩ずつ足を踏み出して行くだけのことだ」という人間である。

Tom said, “I'm still layin' my dogs down one at a time.”

“Yeah, but when a fence comes up at ya, ya gonna climb that

fence.”

“I climb fences when I got fences to climb,” said Tom.

(XVI, 237)

トムを心を占めているのは、目前のことである。今、ここで自分が何をなすべきか、なのだ。壊れたベアリングを直すこと、それがすべてなのだ。

“This here bearing went ont. We didn’ know it was goin’, so we didn’ worry none. Now she’s out an’ we’ll fix her. An’ by Christ that goes for the rest of it! I ain’t gonna worry. I can’t do it. This here little piece of iron an’ babbitt. See it? Ya see it? Well, that’s the only goddamn thing in the world I got on my mind.

(237)

そして修理が済むと、トムは、観光用車にケイシーを乗せ、一行の待つキャンプ地へ向かった。その車中、ケイシーは、トムの車修理の技術にひどく感心しながら言った。

“Funny how you fellas can fix a car. Jus’ light right in an’ fix her. I couldn’t fix no car, not even now when I seen you do it.”

(XVI, 252)

このケイシーの感嘆の声に対し、トムは我が意を得たりとばかり答える。

“Got to grow into her when you’re a little kid,” Tom said. “It ain’t jus’ knowin’. It’s more’n that...”

(252)

「ただ頭で知っているだけじゃ駄目なんだ。それ以上のことなんだな。」身体に覚えさせるのでなければ、「体得」するのでなければ、実際の役には立たないのだ。これが、先にも指摘したトムの反知性主義の本領である。

(4)

皆が待つキャンプ地に着いたトムとケイシーは、はじめてカリフォルニアの実態を知った。西から戻ったところだと言うボロをまとった一人の男が、その悲惨な現実を物語ってくれたのだ。失業者があふれているのに乗じて、雇用者たちは大量の求人ビラを撒きちらし、飢餓に苦しむ大勢の失業者たちを集めて

競争させ、最低の賃銀に切り下げてしまうのだ。そして、こうした労使の内実を知るまでに一年もかかり、その間に、妻を死なせ、子供二人を死なせてしまったと男は訴える。

“...I can't tell ya about them little fellas layin' in the tent with their bellies puffed out an' jus' skin on their bones, an' shiverin' an' whinin' like pups, an' me runnin' aroun' tryin' to get work—not for money, not for wages!... Jesus Christ, jus' for a cup a flour an' a spoon a lard.”
(XVI, 260)

これこそ男がみずから体験した、カリフォルニアでの移住者たちの実態であった。

男の話を聞いていたトム、ケイシー、おやじの三人の心に不安がよぎった。ケイシーにはそうした弱肉強食の労使関係を推測することはできた。だがトムには、まだ漠然とした不安以上のものにはなりえなかったのだ。

やがて、カリフォルニア州に入り、ニードルズで一行はテントを張った。そしてトムたちは、カリフォルニアを引きあげる途中だという親子連れに出会い、再びその実態を耳にしたのだ。移住労働者たちが「オーキー」という蔑称で呼ばれ、白眼視されていることをその親子は語った。だが、再び当惑気味のおやじに向かってジョン伯父は言った。

“...We're a-goin' there, aint we? None of this here talk gonna keep us from goin' there. When we get there, we'll get there. When we get a job we'll work, an' when we don't get a job we'll set on our tail. This here talk ain't gonna do no good no way.”
(XVIII, 283)

これを聞いたトムは、莞爾として笑った。正に自分の意見そのままだったからである。そして、セサリーの病気が悪化して先に進むのを断念したウィルソン夫妻に、心ならずも別れを告げたジョード一家は、砂漠を越え、カリフォルニア大溪谷地帯に入り、やがてフーヴァーヴィルのキャンプにたどり着いた。トムはそこで知り合いになったフロイドから、更に詳細な移住労働者たちの実態を知らされる。雇用者たちは、大量のピラを見て集まった失業者たちに自分たちの言い値の低賃銀を押しつけること、桃の熟す短期間に必要な大勢の人手はそれが終わるや否や追い出されること、などをフロイドは説明してくれた。その時、トムの脳裏にひらめくものがあった。

“Well, s’pose them people got together an’ says, ‘Let ‘em rot.’
Wouldn’ be long ‘fore the price went up, by God!” (XX, 336)

「みんながいっしょになって『腐らしちまえ』って言ったらどうなんだ。」この時トムははじめて「連帯」ということに思い至ったのだ。これは、トムの精神的成長を検討する上で、極めて重要な言葉である。「孤絶した個人」主義の殻を破って、社会的連帯へと自己拡大する端緒となったからである。

だが、現実には更に複雑なのだ。労働者たちが団結するためには指導者が必要となる。だが指導者が演説を始めると、待ちかまえていた治安当局に逮捕される。こうして指導者となると、次々に刑務所におくられるのだが、家族もっている場合には逮捕される訳にはいかない。その上、農場主たちのブラックリストにのったら最後、仕事につく機会は一切失われるのだ。こうしたフロイドの話にトムの怒りは心頭に発した。

その日の夕方、仕事請負人がやって来た。しかし、その手口を知っているフロイドが、免許状の提示を求めると、男は保安官補を呼んで、紛争煽動の口実でフロイドを逮捕しようとした。だが、突然逃争したフロイドを追いかけてよとした保安官補に、トムは足をかけて倒す。そこへケイシーが現われて、男の首を蹴って昏倒させ、トムの身代りとなって逮捕されて行った。トムがつかまれば間違いなくマッキヤレストターへ送り返されるからだ。だが、ケイシーは不思議なことに、征服者のような誇り高い表情を見せながら去って行ったのだ。この事件でトムの警察権力に対する不信任は一挙に増大した。それと同時に、ケイシーのトムに対する温情はトムの心を強く打った。トムはアルに向かってこう言っている。

“Casy shouldn’ of did it. I might of knew, though. He was talkin’
how he ain’t done nothin’ for us. He’s a funny fella, Al. All the
time thinkin’.” (XX, 369-70)

この事件のあと、ジョード一家はフーヴァーヴィルを出て南へ向かった。だが間もなくジョード一家のトラックは、移住労働者の追放のため、武装し道路封鎖の最中の男たちに阻止されたのだ。そして、男たちから「オーキー」という罵言を投げかけられた時、トムの怒りは正に爆発しかかった。だが、おっかあは、全身をけいれんさせながら懸命にこらえているその腕にしがみついて、辛うじて押えた。

“Easy,” she said. “You got to have patience. Why, Tom—us people will go on livin’ when all them people is gone. Why, Tom, we’re the people thet live. They ain’t gonna wipe us out. Why, we’re the people—we go on.”
(XX, 383)

そして、トムが

“We take a beatin’ all the time.”

と口をはさむと、おっかあは、にっこり笑って言葉を継いだ。

“Maybe that makes us tough. Rich fellas come up an’ they die, an’ their kids ain’t no good, an’ they die out. But, Tom, we keep a-comin’. Don’ you fret none, Tom. A different time’s comin’.”
(383)

(5)

次にジョード一家がたどり着いたのは、ウィードパッチ国営キャンプだった。ここは警官が令状なしに立ち入り出来ない、完全な自治組織であった。

トムは、翌朝ウォリス親子の世話で、五日間の仕事を手に入れる。それはパイプ埋めの仕事で、雇い主は良心的なトマスという男だった。しかし、農業組合から、時間当り30セントから25セントへの切下げを強要されて、トマスは苦り切っていた。翌年の貸付金のことを考えると、その指示に逆らえなかったからだ。25セントで働かざるを得ない三人に対して、心苦しさを覚えたトマスは、次の土曜日の晩に注意するようにと、重大な秘密を打明けてくれた。組合は、国営キャンプのように、保安官補の立ち入り禁止した自治組織を目の敵にしている、次のダンスパーティーで言争いを仕組み、その騒ぎを理由に保安官補を突入させる謀略を企んでいる、というのである。

そのダンスパーティーの晩、あやしげな三人組を近くで見張るのがトムの役だった。やがて三人組は、パートナーの奪い合いで騒ぎを始めかけたが、トムたちはすかさず取り囲んで、場外へと連れ出してしまったのだ。こうして、待ち構えていた保安官補たちに立入る口実を与えないことに成功したのである。

だが、一家はこの国営キャンプに一ヶ月滞在したものの、仕事も得られぬままに再びキャンプを後にせざるを得なかった。しかし幸いに、北方ピックスレ

一のフーパー農場に仕事のあることを知り、一家はそこを目差し、その農場の入口を、警官の先導で通り抜けた。だが、トムは、そこに拳を振り上げて怒っている人々の顔を見たのだ。

こうしてともかくトムは、家族の者たちと久しぶりに一日働くこにが出来た。しかし、来る時に見た門外での騒ぎが気になっていたので、夕食をすまとせる、様子を見に出かけた。農場の柵を抜け出てハイウェイの橋の下のテントの前を通りかかった時、驚いたことに中からあのケイシーがひょっこり顔を出したのだ。

ケイシーは例によってしゃべりまくる。トムの度々耳にした、真理を見出すために荒野へ入った話、そして刑務所の中でやっとそれを見つけたこと、犯罪の原因のほとんどが困窮にあったこと、囚人たちが団結して待遇改善に成功したことなど、トムに物語った。だが、こうしたケイシーの話にも、トムはただ「分からねえな」を繰り返すばかりだった。未だ啐啄の機は熟していないのだ。知解にも、また時は必要なのだ。ケイシーは言った。

“Maybe I can't tell you,” he said. “Maybe you got to find out...”
(XXVI, 522)

実はこの時ケイシーたちはストライキの最中であった。一箱5セントの賃銀ということでやって来たが、農場側は2セント半しか支払わないと言い出した。そこでやむを得ずストライキに訴えたのだと言う。しかしトムが5セントで働いたことを話すと、ケイシーは、農場で働いている連中にもストライキへの参加を呼びかけ、説得してくれとトムに頼んだ。だがトムにはそれは無理なことに思えた。

“We was outa food,” Tom said. “Tonight we had meat. Not much, but we had it. Think Pa's gonna give up his meat on account a other fellas? An' Rosasharn oughta get milk. Think Ma's gonna wanta starve that baby jus 'cause a bunch a fellas is yellin' outside a gate?”
(524)

労働者たちが、分裂せず、統一団結してストライキを実行しさえすれば成功は疑いない。それが自分の到達した結論である。にも拘らず、そのための条件を整えることが、いかに難しいか、そのことにケイシーは苛立ちを覚えた。だがケイシーとても、弱い立場の人々が目先の利から離れられない心情をよく理解

していたのだ。

こうして、思いがけない再会にトムとケイシーの話は尽きなかったが、外に不穏な気配を察し、テントから出て避難しようとした矢先、ケイシーはつるはしを持った男に横顔を割られて倒れた。トムはすかさずその男をなぐり倒した自分も顔面に傷を負い、やっと家族の待つ小屋までたどりついた。翌朝、トムは家族の者たちに事情を話した。ケイシーと再会したこと、ケイシーが殺されたこと、ケイシーたちのやっていたストライキがつぶされ賃銀が一箱2セント半になりそうなこと、それに自分たちは結果的にはスト破りをやっていたことになること、などをトムは説明した。そして、トムはケイシーの最後を思い出して、顔をおおった。

“...Casy was still a—good man. Goddamn it, I can't get that pitcher outa my head. Him layin' there—head jus' crushed flat an' oozin'. Jesus!”
(XXVI, 533)

トムは、家族に迷惑をかけないように今晚出て行くと主張したが、家族の崩壊を恐れる母親の哀願を受けて、トムはしばらく家族のもとに留まる決心をする。そして、ジョード一家は早速フーパー農場を去って、北へ向かったのだ。その途中、川のふちに並んだ有蓋貨車の長い列を見つけ、一家はその一つに住み、トムは傷が癒えるまで近くの藪に隠れることになった。

(6)

ジョード一家は、この有蓋貨車に住みついて、綿つみの生活を続けていた。だがある日、ルーシーが子供同志の喧嘩で兄トムのことを口に出してしまったのでトムに危険が及ぶことを恐れたおっかあは、早速トムに知らせに出掛けたのである。この時おっかあは、トムの安全を願い、秘かにトムとの別離を覚悟していたのだ。

排水渠まで食物をとりに来たトムは、おっかあを洞穴へと案内した。そして真暗闇の中で交された別離の会話は、この小説中の最も感動的な場面の一つである。トムはしみじみと言った。

“Lookie, Ma. I been all day an' all night hidin' alone. Guess who I been thinkin' about? Casy! He talked a lot. Used ta bother me. But now I been thinkin' what he said, an' I can remember—all of it.”
(XXVIII, 570)

洞穴の中でこうして一人静かに考える時をもったのは、トムの内的成長にとってまたとない幸運であった。現在のトムの心は、ケイシーのことでいっぱいとなっていた。そしてケイシーのその真理探求の過程で語った言葉が、今ようやくトムの中に再生しかかっているのだ。

“Says one time he went out in the wilderness to find his own soul, an’ he foun’ he didn’ have no soul that was his’n. Says he foun’ he jus’ got a little piece of a great big soul. Says a wilderness ain’t no good, ’cause his little piece of a soul wasn’t no good ’less it was with the rest, an’ was whole. Funny how I remember. Didn’ think I was even listenin’. But I know now a fella ain’t no good alone.”

(570)

それまでただ聞き流していたつもりのケイシーの一言一言が、蘇生し、千鈞の重みをもって今のトムの胸に迫って来ているのだ。自分の魂を求めて荒野に出掛けたが、自分だけの魂などないこと、それは大なる魂の一部分にすぎず、残りの魂と一体になり調和してはじめて完全になること、それ故に人間は一人一人がばらばらに孤立することなく、互いに和合し連帯することによってはじめて人間として完成すること——こうしたケイシーの言葉が、今やトム自身の口から出ようとしているのだ。

そして、トムはケイシーの言った「伝道の書」の一節を思い出した。

“Two are better than one, because they have a good reward for their labor. For if they fall, the one will lif’ up his fellow, but woe to him that is alone when he falleth, for he hath not another to help him up. Again, if two lie together, then they have heat: but how can one be warm alone? And if one prevail against him, two shall withstand him, and a three-fold cord is not quickly broken.”

(570)

「二人は一人にまさる」といい、「二人ともに寝ぬれば温暖なり」という。また「三根の縄はたやすく断れざるなり」という。これは、人間が一人切り離されたのでは人間らしく生きられない、人々が互いに助け合って、はじめてよく生きることが出来る、という人間の真実に他ならない。そして、こうした人間連帯の思想を理解するためには、当然トム自身のうちに、これに照応するものが育まれていなければならない。今やその機が熟したのだ。仮釈放になっ

て家路を急ぐ途中でケイシーと再会し、カリフォルニアへの旅を共にしたこと、移住労働者としての生活、フーパー農場でのケイシーのストライキと彼の死、これらの様々な苦難の体験と見聞とが、トムの意識下に沈潜して、ケイシーの思想を受け入れる素地を築いたのである。

それではトムは一体何をやろうとしているのか、おっかあはそれが知りたかった。が、これに対するトムの答えは明解であった。「ケイシーがやったことをさ。」ケイシーの築き上げた思想を受け継ぎ、果たせなかった彼の願いを、代わって実現させようと決意したのである。この時トムは、ウィードパッチの国営キャンプのことを思い浮かべていた。それこそ一つの理想の社会であるように思われたからである。

“I been thinkin’ how it was in that gov’ment camp, how our folks took care a theirselves, an’ if they was a fight they fixed it theirslf; an’ they wasn’t no cops wagglin’ their guns, but they was better order than them cops ever give. I been a-wonderin’ why we can’t do that all over. Throw out the cops that ain’t our people. All work together for our own thing—all farm our own lan.” (571)

以前ケイシーに、国営キャンプでは警察の立ち入りが認められず、住民の一人一人がその役を果たしていることを話した時、彼が目を輝かせて興奮しながら聞いていたその姿を、トムは思い浮かべていたに違いない。個人の自立の中に人類の連帯があり、人類の連帯の中に個人の自立のあるような社会、それがトムの目差すものなのだ。

一方、おっかあはトムの消息を知る方法が気がかりでならない。

“How’m I gonna know ’bout you? They might kill ya an’ I wouldn’t know. They might hurt ya. How’m I gonna know?” (572)

この母の問いに対する答えをトムはしばし模索した。そしてトムは、再びケイシーの言葉を反芻した。ケイシーは、人間には自分一人の魂はなくて大きな魂の一片にすぎないと言った。それを逆に言えば、一人の人間の魂は宇宙大の魂でもあり、すべてが自分の魂だとも言えるではないか。そして、人間の生の証しは、その人の創造した思想とその実践とにあるとすれば、トムの生の証しはトムの思想の形象化されるあらゆる場所にあるとも言えるのだ。それ故トムは

最も文学的な表現をもって言葉を続けることが出来たのである。

“Then I’ll be all aroun’ in the dark. I’ll be ever’where—wherever you look. Wherever they’s a fight so hungry people can eat, I’ll be there. Wherever they’s a cop beatin’ up a guy, I’ll be there. If Casy knowed, why, I’ll be in the way guys yell when they’re mad an’—I’ll be in the way kids laugh when they’re hungry an’ they know supper’s ready. An’ when our folks eat stuff they raise an’ live in the houses they build—why, I’ll be there. See?...”⁸ (572)

こうしてトムは、家族から離れ、ケイシーの「大なる魂」の思想の後継者として、自らの使命に生きてゆくことになるのである。

※ ※ ※

トムと別れた後のおっかあたちは、ウェンライト家との友情を確かめあう一方、ローザシャーンの死産、そして有蓋貨車は大洪水と災難に見舞われる。やむを得ず、おっかあはおやじとローザシャーンと子供たちをつれ、丘の上の納屋へたどり着く。そしてそこでローザシャーンが、あの神秘的な微笑を浮かべながら餓死寸前の男に乳房をふくませる場面で小説は終わるのだ。

カーペンターの言ったように、ケイシーがジョード一家に与えた影響は大きい。わがまま娘だったローザシャーンも最後に大転換を見せているし、おっかあも、単にジョード一家を守るものから、家族を超えて、ウィルソン家、ウェンライト家との友情、そして大きな社会的連帯へと心を広げてゆく。それはおっかあが出産間近かのローザシャーンに語って聞かせた言葉の当然な帰結である。⁹

トムもまた、見てきた通り、ケイシーとの人間的交流を通し、またおっかあの慰めと励ましとによって、ケイシーの「大なる魂」の思想の新たな担い手に成長したのだ。トムは、おっかあの予言、

“...They’s some folks that’s just theirself an’ nothin’ more....
You wasn’t never like that...Ever’thing you do is more’n
you....” (XXVI, 482)

の通り、ただの「孤絶した個人」主義から、より大なる社会的連帯へと自己を

拡大していったのだ。

旱魃で始まり、大洪水で終わる、またそれに対する男たちの怒りで始まり、怒りで終わるこの小説の構造は、自然と人間との関わりを一つのサイクルとして描こうとしたスタインベックの意図を示している。同様に、この小説は思想的側面から見れば、いわば「大なる魂」の発見で始まり、「大なる魂」の継承者の出現で終わったと言ってよいだろう。

〔註〕

テキストには

John Steinbeck, *The Grapes of Wrath: Text & Criticism* (New York: The Viking Press, 1972)

を用い、各引用文のあとに、適宜その章と頁を記した。

1. 拙稿「『怒りのぶどう』におけるジム・ケイシーの内的発展について」（静岡大学人文学部『人文論集』№28-1, 1977）参照。
2. F. I. Carpenter, "The Philosophical Joys" (前掲テキスト, 709頁)
3. "There's just stuff people do. It's all part of the same thing." (IV, 32)
4. "Joad's eyes dropped to the ground, as though he could not meet the naked honesty in the preacher's eyes." (VI, 33)
5. "If ever a man got a dose of the sperit, I got her!" (VI, 76)
6. "He ignored the whole speech of the preacher, as though it were some private thing that should not be inspected." (VI, 77)
7. 旧約聖書「伝道の書」第4章, 9-12節。
8. このトムとおっかあ^カの別離は、「『怒りのぶどう』における別離の思想」として、論ずる予定である。
9. "When you're young, Rosasharn, ever'thing that happens is a thing all by itself. It's a lonely thing. I know, I 'member.... They's a time of change, ... An' then things ain't lonely any more." (XVIII, 285-6)